かわうその恩返し

烏山には、那珂川という大きな川があってな。
その昔、魚や、かに、えびなどが大好きな、かわうそたちの住み家となっていたと。かわうそたちは、いたずらが大好きでな、村の人たちをばかにしては、おもしろがって遊んでいたと。
興野に、仙造という腕のいい漁師がおった。河原に小屋を作って、毎日、魚をとって暮らしているやさしいじいさんだった。
「今夜は、魚がいっぺえとれるといいんだがな」
なんて言いながら、夜、網ぶちに行った。すると、いたずらかわうそが先まわりして、魚を全部おっぱらっちまったと。また釣りに行けば、釣り竿のまわりへきて、
「じいさん、かにくれ。じいさん、かにおくれよ」
なんて言いながら、おもしろそうに泳ぎまわって、じいさんのじゃまばっかりしていたと。だから、魚が釣れない日がたびたびだった。
「ああ、今日もだめだったか、でもな、かわうそたちが腹いっぺえになったんだら、いいか」
そんなやさしい仙造じいさんは、いつもにこにこ顔で、かわうそたちを見ていたと。
ある日のこと、じいさんが舟で釣りをしていると、体のでっかいかわうそが、舟のまわりへ来て、苦しそうに泳ぎまわっていたと。何かじいさんに頼みごとでもあるような、そんなそぶりで、舟のまわりを離れようとしなかった。不思議に思ったじいさんは、
「おい、かわうそ、どうしたんだ。おおい、どうしたんだ」
見たらばなんと、唇にでっかい釣り針が突きささって、口もあけられない程、はれあがっていたと。
「あれー、大変だ」
じいさんは急いでかわうその首つかまえて、針をひき抜き、傷口をきれいに洗ってやったと。かわうそは、うれしそうにしっぽをくねらせながら、深い方へ消えていった。
それからしばらくして、じいさんは釣りに行った。すると、次から次と、竿を置くひまもないほど釣れたと。また、夜になって網ぶちに行けば、これまた、入るは、入るは、

一網ごとにかかえきれない程入った。
「おや、これはいってえ、どうしたことだ」
不思議に思ったじいさんが、まわりをよく見ると、あのでっかいかわうその仲間が、いっぱい集まって、魚をじいさんの方へ追っていた。だから、じいさんの舟のまわりには、魚が群れんなって集まって来ていたと。おかげでじいさんは、たちまち国一番の、魚とり名人と呼ばれるようになったと。
この話が殿様の耳に入って、大勢の家来を連れて、じいさんの魚とりの様子を見に、河原へやって来たと。その時の、じいさんとかわうその得意げな顔。
「ああ、よがった、よがった。魚がいっぺえとれたぞ。かわうそ、ありがとうな」
そういいながら、殿様にいっぱいの魚を焼いてやった。魚のこげるような、香ばしい、いいにおい。いやあ、殿様、喜んだ、喜んだ。
そんな事があってからじいさんは、殿様に気にいられて、お城の御用漁師としてめしかかえられたと。
それからも、かわうそに今まで通り手伝ってもらい、魚をいっぱいとってお城へ納め、一生気楽な暮らしが続いたと言うことだ。

おしまい

烏山の民話第二集より